



川崎歴史ガイド

大山街道

ルート



大山街道



●赤坂御門にはじまる大山街道は、西方へ向う街道。

江戸赤坂御門を起点として、多摩川を渡り、二子、溝口を経て多摩丘陵を上っていくのが大山街道です。
街道はさらに厚木、大山のふもとの伊勢原、秦野を経て、関所のあつた矢倉沢を過ぎ、足柄峠を越えます。東海道と甲州街道の間を江戸へ向かう脇往還として、「厚木街道」あるいは「矢倉沢往還」とも呼ばれてきました。

この道は、大山詣りの道として知られています。大山は、高さ一二四六メートル。丹沢山地の東端にそびえる峰で、晴れた日には川崎からもその姿を見ることが出来ます。山頂には、五穀豊穰、商売繁盛の神様として、広く江戸庶民の信仰を集めた阿夫利神社があります。大山は別名「雨降山」。よく雨雲を呼ぶといっているので、古くから人々が雨乞いに出かけたところです。



大山詣りのための「大山講」は関東、東海各地に生まれ、とくに江戸の町々では、さかんにこの講がつくられました。夏には、金剛杖などを手にした講中の人々が、賑やかに街道を通り過ぎていったのでしよう。

物資を輸送する商業ルートとしての役割も重要でした。溝口・二子の宿が定められたのは、寛文九(1669)年。行人人や物資の量がふえたのは、江戸後期のことです。馬の背で運ばれたのは、駿河の茶や真綿、伊豆の椎茸、乾魚など。秦野地方のたばこづくりも盛んになって、これらを扱う商人たちが宿は活況を呈しました。

明治になってこの道は、神奈川県東部のほぼ中央を東西に走る重要な道として「県道一号线」に変わりました。その後さらに改良され、現在では、昔の道筋をほぼ踏襲する国道二四六号線となつています。

今、二子・溝口・ねもじり坂にかけて旧道を探訪すると、わずかに残る道標や坂道などに、昔の面影を偲ぶことができます。

二子ふたごの渡し

多摩川に橋が架けられたのは、比較的新しく、それまで人々は「渡し舟」に頼るほかはありませんでした。

大山街道を東京と結ぶ「二子の渡し」は、旅人にとっても、農産物を商う人にとつてもなくてはならぬ存在でした。

渡し舟には、人や駄馬を渡す「徒歩舟」と、荷車などを載せる「馬舟」があつて、馬舟には、荷車なら五台、荷馬車でも二台ほどは載せられたといわれます。

渡し場近くの河原には、茶屋、料理屋、菓子屋、蕎麦屋などもあつて、川遊び、

舟待ちの人々を相手にけつこう繁盛していたものです。

しかし、昔の多摩川は、今のような川ではなく、洪水のたびに、三日、四日と続く「川どめ」も珍しくありませんでした。

本格的な橋が架けられたのは大正十四年。ようやく完成したこの橋は、二子の渡しにちなんで「二子橋」と名づけられ、今に至っています。



●かの子碑のたつ境内は閑静。



●当時、多摩川は絶好の遊泳場（大正7年）。



●二子橋渡りぞめの記念写真。

二子神社とかの子碑

二子橋の近く、二子神社のすぐわきに、ひときわ目立つ抽象彫刻がたっています。この地二子出身、岡本かの子の文学碑です。

地元有志の発意がきっかけとなり建てられたかの子碑。彫刻は、岡本太郎の製作。母・かの子を想いつつ、「誇り」と題しています。庭園風の築山と台座の対照も美しく、こちらは建築家、丹下健三の設計。

碑が完成し、除幕式が行われたのは、昭和三七年、秋のことでした。

年々にわが悲しみは深くして、いよ

よ華やぐ命なりけり

というかの子の歌が刻まれています。さて、このモダンな抽象彫刻と隣り合う二子神社。創建は、寛永十八（1641）年と言われ、その歴史は優に三百年を超えます。昔は「神明社」と呼ばれていたものです。明治になって、別の神社（大陸天稲荷）を合祀。以後、天照皇大神を祀り、社名を二子神社としています。





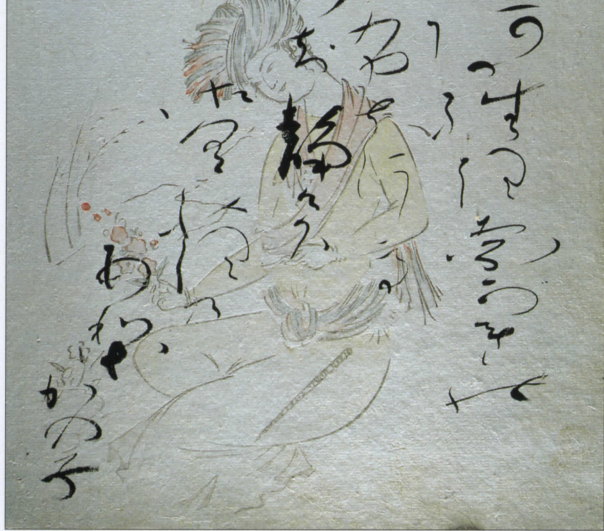
●高津尋常小学校卒業 左端がかの子。中央は村長だった父。

今は浄土真宗のこの寺に、改宗にまつわる話が伝わっています。
 今から四百年近くも前、天目山で滅んだ武田の家臣が、多摩川づたいにやってくる。この寺に逃げ込み、やがて出家。専浄と号した彼が、その後、本願寺教如上人の教化を受けて、それまでの天台宗から浄土真宗に改めた。そんな話です。
 創建当時二子塚にあったこの寺は、たび重なる洪水を逃がれて、江戸前期、地形的にやや高いこの地に移建されています。寺が移ると、一緒に二子塚の農民たちも移住し、のちの二子村を形

光明寺と二子学舎

つくっていったのでした。
 ところで、この寺の本堂は、一時、教室として使われたことがあります。学制施行後の明治七年から九年まで置かれた「二子学舎」は、今でいう小学校。つまり、この地の学校教育は、光明寺本堂から始められたことになりました。
 境内には岡本かの子の兄・雪之助の墓があります。谷崎潤一郎とも親交の深かった大貫雪之助。若くして逝った文学者です。

●光明寺墓地の大楠。



●「山川の荒き流れの淵にして命静けく咲く花のあり かの子」

大貫家の人々

大貫家は、江戸時代、屋号を「大和屋」といい、幕府諸大名の御用をつとめたほどの商家でした。
 明治になってこの旧家に生まれたのが、大貫雪之助、その妹、かの子。
 雪之助は、東京帝国大学在学中から「晶川」と号して、詩や小説を発表。島崎藤村門下の逸材として将来を囑望されていました。当時、親友だった谷崎潤一郎なども、よくこの大貫家を訪れています。雪之助は、しかし、大学卒業後二四歳の若さで急逝。いま光明寺に残るひととき大きな「文学士大貫雪之助の墓」からは、彼を失った人々

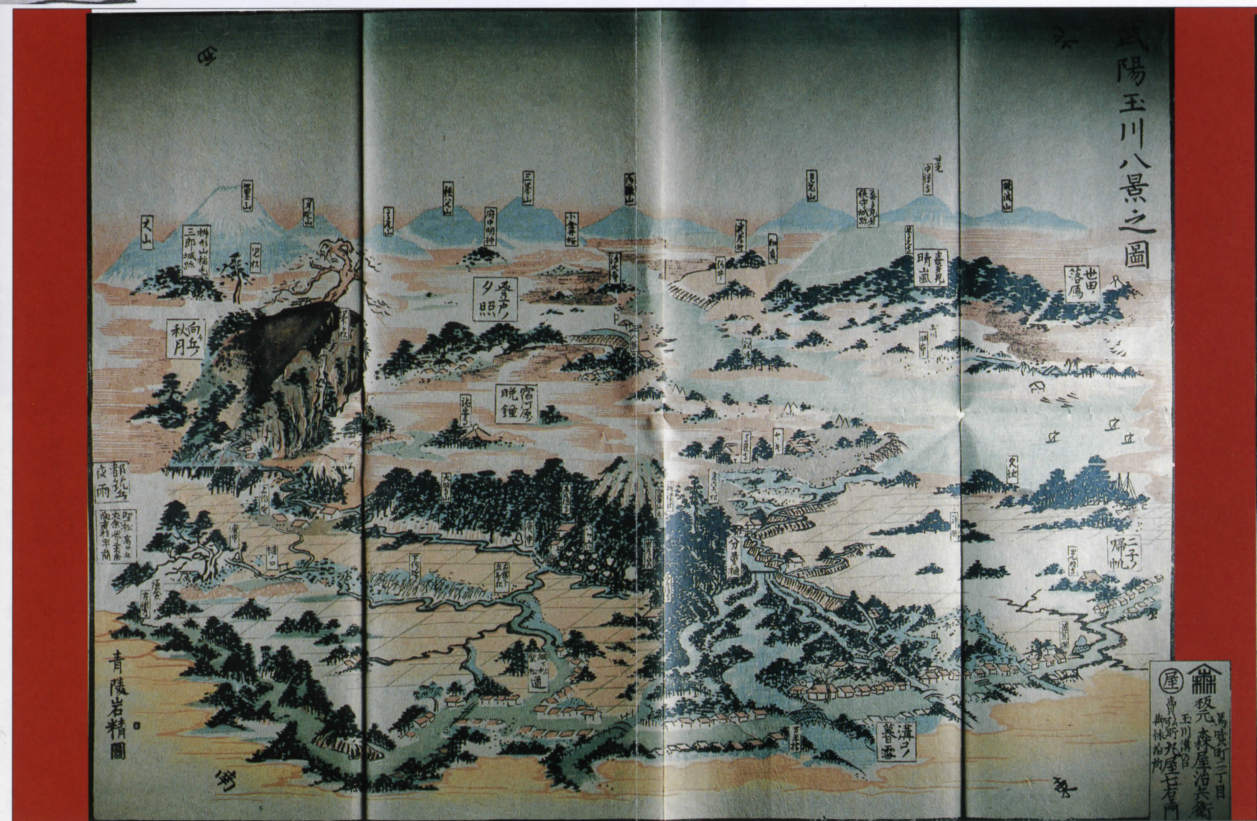
の落胆ぶりがうかがわれます。
 かの子は兄や谷崎の影響を受けながら、文学少女として成長し、二二歳で漫画家岡本一平と結婚します。やがて『鶴は病みき』で文壇に登場。暗い時代を背景に『母子叙情』『生々流転』など魅力のある作品を次々に発表します。
 かの子・一平の子として生まれたのが、前衛的な画家・彫刻家として活躍した岡本太郎。その作品は平成十一年、生田緑地に建設された川崎市立岡本太郎美術館に収蔵されています。
 土蔵のあった大貫家は再開発で姿を消しました。

一子・溝口

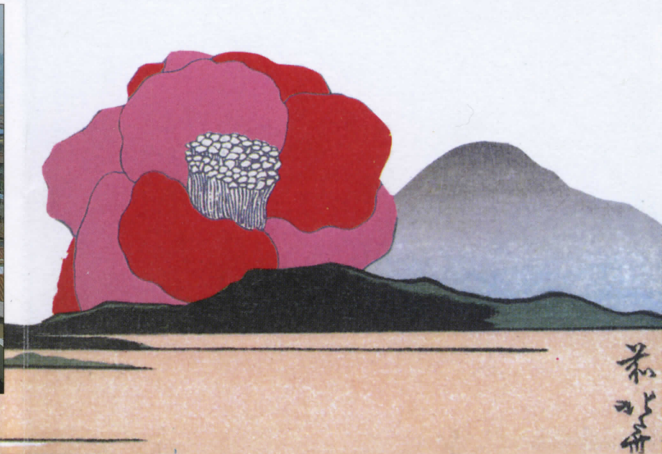
溝口村・二子村が大いに発展したのは、江戸時代に大山街道の宿駅となっ
てからです。

江戸から、あるいは、江戸へ。いろ
いろな産物がここを通り、旅人相手の
旅籠や商家が軒を並べていました。

この錦絵は、街道を行く
旅人に土産として売られ
ていたものです。当時の
画家青陵は石精が寛政三
(1791)年に描いたも
ので、右下には、販
売元となった溝口村
の名主丸屋七右
衛門の名も見えます。



●何気ない路地に「歴史」の漂う街。向うは多摩川。(昭和56年頃)





●右側が蔵造りの店。左側は江戸時代の建物である母屋。



●街道筋の提灯屋。(昭和56年頃) ●母屋と店の境。(昭和56年頃)

蔵造りの店

田中呉服店は、江戸時代から続く老舗です。また、いまも「蔵造り」という店構えをとどめる貴重な存在でもあります。

重い瓦屋根と土の壁。母屋との仕切りは、厚い土戸。まわりの火災から店を護るつくりです。内部は、思い切つて太い柱や梁が使われ、しかも全く釘を使わずにすべてホゾを切つて組立てられています。二階の窓にある頑丈な格子は泥棒よけ。

さほど珍しくありませんが、その合理性、耐久性を店舗として利用したところが、大きな特色です。とはいえ、ぜいたくな建て方に違いなく、このような例は、そう多くありません。

今の田中呉服店は、明治末に建てられたもので、数少なくなった代表的な蔵造りの店です。



江戸時代からの薬屋

多摩川からこちら、大山街道で薬屋といえは「灰吹屋」だけ。江戸時代の話です。

「灰吹屋の生業は良く効く」と評判は街道を行き交う人々によって広められ、瀬田、神奈川、また小杉、登戸など、かなり遠方からも客が来るほどでした。

初代鈴木仁兵衛のあとには代々仁兵衛を名のりました。特に三代目の仁兵衛。この人は、俳句をよくしたことで知られています。俳号は、玉川老人亭玉水。この地の師匠格でした。彼が文政十二(1829)年春に建てた芭蕉句碑には、

世を旅に代かく小田の行きもどり

芭蕉

の句が刻まれています。句碑は、もとの位置から移され、今は宗隆寺境内にあります。

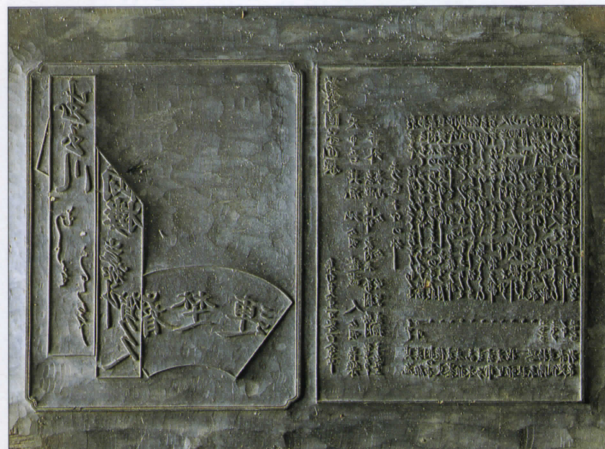
ところで灰吹屋。代々続き、かつては蔵を店にしていました。親しい者が来れば、世間話をし、ときには将棋をさしたりしながらの商売だったようです。昭和三五年、薬事法によって店の設備条件が求められ増築しましたが、今はこの店も移転し、蔵が残されています。



●上田家の隣りに紺屋もあった。



●粉薬をつくる薬研。



●俳諧の版木。神木、野川など詠人の住いがあって面白い。

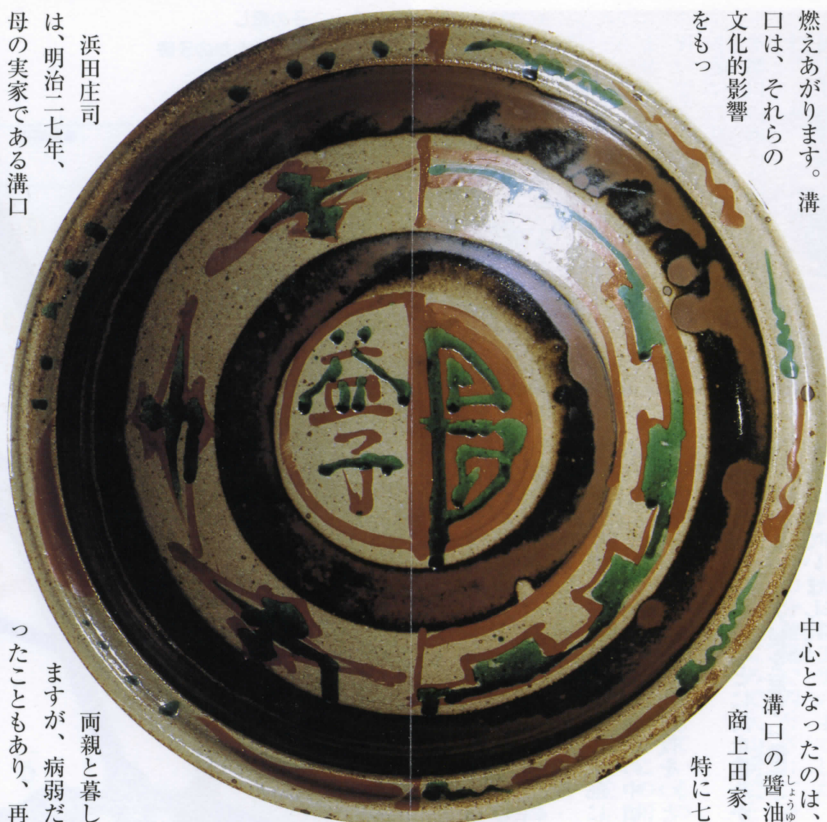
民権運動と上田家

明治の初め、立憲政治をめざして各地に起こった自由民権運動は、三多摩、南武州、相州などでも激しく燃えあがります。溝

口は、それらの文化的影響をもつ

とも受けやすい位置にあり、たちまち橋樹郡における運動の拠点となったのです。

中心となったのは、溝口の醤油商上田家、特に七



●庄司の作品。益子の文字の入った作品は珍しい。

浜田庄司

は、明治二十七年、

母の実家である溝口

の太田家で生まれました。太

田家は、江戸から明治にかけての蘭方

医「太田道一」に始まり、今につづく

古い医家です。

庄司は、その後三歳まで、東京芝の

両親と暮し

ますが、病弱だ

ったこともあり、再

び川崎の溝口へ預けられます。

今度は、太田家ではなく、同じ溝口に

住む祖父のところでした。そこが、江

戸時代から続く和菓子老舗「大和屋」

です。以後十歳になるまで、庄司は、

陶芸家浜田庄司の家

絵を描くことの好きな少年として、ここ溝口の日々をおくったのでした。

やがて陶芸の道へ進んだ彼が、第二の故郷として栃木県益子を選んだのは、

三十歳のときでした。自然に溶け込んだ生活の中から、数々の作品が生み出

されていったのです。彼によって磨き

がかけられ、世界的な評価を得るまで

になった益子焼。庄司は、我国最初の

「人間国宝」でもあります。川崎は、

彼にとって、少年時代を過ごした思い

出の地。今は溝口の古刹・宗隆寺に眠



●受け継がれてきた上田家。



●醤油醸造の大釜もあった。

代目忠一郎でした。県議でもあった彼は、石坂昌孝ら、当時の著名な民権家たちと語らい、明治十四年には、民権結社「橋樹郡親睦会」を旗揚げ。私財を投じて目ざましい運動を展開しています。のち、自由党に入り、橋樹郡自由民権運動の最高幹部として、在村民権家井田文三らも育てています。

当時、多くの農民や商人たちが演説

会を開き、軒昂たる彼らの意気が、やがて国会開設へと繋がっていきます。民衆達の討論から国政を動かしていく運動でした。

上田家には、忠一郎の甥、のちに八代目となる正次の日記が残っていて、当時の様子を詳しく伝えてくれます。かつての上田家を偲ばせる長屋門と庭は、後の再開発で姿を消しました。



●庄司が育った大和屋。丁稚と袴をはいた子供。



●明治の頃の丸屋。手前は二ヶ領用水にかかる大石橋。

溝口・二子宿の間屋跡

二ヶ領用水にかかる大石橋。丸屋・鈴木七右衛門の屋敷は、その北東部にありました。丸屋は、江戸時代の中頃から代々溝口・二子宿の間屋役をつとめ、名主を兼ねた家です。

昔は、宿場に着くごとに馬を乗りかえ、また新たに人足を雇う「継立て」が行われていました。

間屋役の主な仕事は、決められた数の人や馬をいつでも用意できるように気を配ること。大きな宿場では、この仕事だけでも大変で、自分の家業がおろそかになった例もあるほどです。しかし、脇街道などでは、宿の規模も小さ

く、継立ての負担は案外軽いものでした。例えば、溝口・二子宿は両宿で一日あたり人足二人、馬一疋という程度でした。そのため、村の有力者が間屋役となり、自分の家を間屋場に使う。同時に名主も兼ねて村の仕事をする。これがふつうだったようです。丸屋もそうでした。

丸屋の本業は「卸問屋」で、秦野のたばこ厚木の麦などを扱い、これはこれでたいそう繁盛したという話です。

府中街道

川崎から府中へ抜ける府中街道は、同時に、東海道と甲州街道を結ぶ道路です。明治二七年に県道となつてからは、改修も進み、「川崎府中県道」として、面目を一新してきました。

市内主要道路の多くは、京浜間を結ぶものですが、府中街道はそれらとクロスして、多摩川の沖積平野をはしる重要な縦貫道路です。いくつかの街道と交わるあたりには、それぞれ小杉、溝口、登戸などの町が発展し、今に至っています。

この道を使って川崎・溝口間に乗合馬車を通じたのは、大正二年。翌年に



●いくつかの造り酒屋もあった。



●かつて街道に残っていた蔵。窓の扉に特徴。(昭和56年頃)

二ヶ領用水と大石橋

現在の川崎市のほぼ全域にあたる稲毛・川崎領。この二ヶ領を潤す農業用水路として建設されたのが二ヶ領用水です。

多摩川の水を利用するためには、堤防を築いて洪水を防ぎ、必要な水だけを引いてくる「用水路」を掘らねばなりません。しかし、これは第二多摩川をつくるに等しい大事業でした。新田開発に力を入れた徳川家康の命を受け、

工事の指揮にあたったのは代官小泉次太夫。さしたる道具もない時代のこと、従事した農民の苦労は計り知れません。ようやく工事が完成し、多摩川水系

最大の農業用水路として、「生命の水」が流れ始めたのは慶長十六(1610)年。

実に十四年に及ぶ難工事の末でした。用水は久地の分量樋で四分され、その本流は大石橋のところで大山街道と交わります。

今の川崎市が細長い形をしているのは、四百年間にわたって村々がこの用水に頼りながら発展してきたことを示してもいるのです。

農業中心から、工業あるいは住宅都市へ。川崎の変化とともに用水もまたその姿を変えていきます。

は、二子・菅間にも開かれています。馬車に代って乗合自動車が行くのは、大正八年。街道と並行して走る南武鉄道の営業開始は、昭和二年のことでした。溝口には、現在のルートの南に狭い旧道が残っています。

今、府中街道には車が目白押し。稲城市で多摩川を渡ると、府中からさらに所沢方面にも通じ、首都圏環状道路の一翼をになっています。





●大晦日の溝口神社。

かつて、大山街道の大石橋から片町の四つ角までは、良質の水脈に恵まれず、人々は毎日の飲み水にさえ不自由していたのです。古くは、名主丸屋の

溝口神社は、もと赤城社と呼ばれ、溝口村の総鎮守でした。「溝口神社」と改めたのは、明治になってからのことです。明治二九年につくられた祭礼用の幟は、勝海舟の筆によるもの。「海舟安房」の文字も見え、今は珍しい「家宝」となっています。

神社の鳥居をくぐって参道の左手、水神宮の祠と、小さな碑が目にとまります。

溝口神社と簡易水道

井戸を親井戸とし、そこからいくつかの溜め桶まで引水していた時代がありました。それでも人々は、この引水設備の完成を祝い、水に感謝し、水神宮を祀ったのです。祠の側面には安政三年と記されています。しかし、やがてその水も飲用に耐えなくなり、大正十二年の関東大震災は、設備そのものにも打撃を加えます。

苦勞してつくった簡易水道の完成は、昭和六年。それを記念する水道組合碑は、祠と合わせて、この地の人々の水に対する苦勞を伝えています。

●勝海舟の書いた幟。たてるのに30人、しまうのに40人かかる。



●その頃の亀屋旅館は二階屋。

「多摩川の二子の渡しを渡って少しばかり行くと、溝ノ口という宿場がある。ちよどと三月初めの頃であった。この日は大空かき曇り北風強く吹いて、さなきだに淋しいこの町が一段と物淋しい陰うつな寒そうな光景を呈していた。（中略）旅人宿だけに亀屋の店の障子には燈火が明るく射していたが、今宵は客も余りないと見えて、内もひっそりとして、おりおり雁頸の太そうな煙管で火鉢の縁を敲く音がするばかりである」

国木田独歩『忘れ得ぬ人々』の一節です。明治三三年三月、独歩二七歳。

国木田独歩と亀屋

武蔵野をめぐり歩き、たまたま泊まったのが、文中にもある「亀屋」でした。当時、亀屋は草葺きの二階屋。見るからに田舎風の宿屋で、たばこ屋を兼ねていました。泊まり客は、主に葉金物、まゆなどを売る旅商人だったようです。

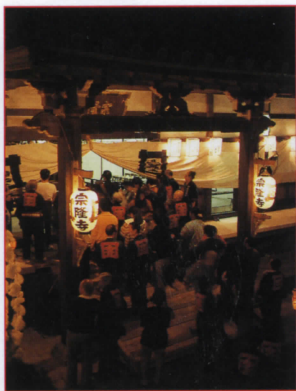
独歩が泊まった縁から、昭和九年、亀屋主人、鈴木久吉の立案で建てられた独歩碑。題字は島崎藤村によるもので、亀屋会館の入口にありましたが、その亀屋会館もなくなり、現在は近くの溝口緑地に移設されています。

宗隆寺と御会式

日蓮宗興林山宗隆寺。古くは天台宗本立寺といったらしく、改宗、改名の経緯がこんな話で伝わっています。

住職の興林と、溝口の地頭宗隆の二人は、同じ夜、夢の中で同じお告げを聞いた。「日蓮宗を奉ぜよ」。二人は、この不思議な遇然を語り合う。やがて、興林は池上本門寺に赴き、教えを受けて改宗した。新しい山号寺号は、二人の名をとって興林山宗隆寺。……ただし、今から五百年も前のことです。

この寺の御会式（日蓮宗の法要）は、古くから営まれ、その賑いは池上本門寺に次ぐと言われます。御会式の夜、



●宗隆寺の御会式。今も10月21日に営まれる。

近くの寺々や講中から出される「万燈」。

三重や五重の塔を形どったもので、灯りが点され、人々はこれを担いで街道をねり歩きます。やがて集まり、列をつくって宗隆寺へ。団扇太鼓が鳴りひびき、纏も加わります。賑やかな灯りの列、人の波。今も昔も、溝口かいわいの人々にとって、楽しいな年中行事です。

参道わきの芭蕉句碑は、江戸末期の地元俳人・老人亭宝水が建てたもの。墓地には、陶芸家浜田庄司も眠っています。

蘭方医太田家と種痘

下作延で生まれ、のちに溝口で開業した蘭方医・太田道一。昭和四十年代まで医家として続いていた太田家の初代です。開業したのは、寛政十（1798）年。西条藩主松平家の御典医となったのもこの時代で、地元民から「御典医さま」と呼ばれた人でした。

以前、太田家の門をのぞき上げると、太い長柄が見えました。駕籠を担ぐときに使われたもので、これを担ぐだけでもおとな二人はかかりそうでした。江戸屋敷への往復には、さぞ立派な駕籠が使われていたのでしょう。

その後、道一とその子東海は、江戸

●花の宗隆寺。（昭和56年頃）



の三大蘭方医に数えられた大槻俊斉から蘭方を学び、種痘法を修得。俊斉が「お玉ヶ池種痘所」（のちの東大医学部）を開いたときには、東海もそれに協力しています。

明治四年、政府の要請で、道一・東海父子が、近隣四ヶ村の村民に種痘を施したことが記録されています。イギリスのジェンナーが種痘法を発見してから約七十年、オランダ人モーニッケがわが国にそれを伝えてから約二十年後のことでした。

この太田家は今、ありません。

●太田家が松平左京大夫から拝領した品。



庚申塔と大山道標

片町の四つ角。ねもじり坂に向かって立つと、右は、向ヶ丘に通じる道。左は、久本から井田へ出て、横浜方向に至る道です。この、左へ折れる角に、庚申塔があります。

仏教とは別の庚申信仰は、平安時代に始まり、江戸期になって特に盛んになりました。「人間の体内には『三尸』という虫がいる。それが、六十日とか六十年ごとに廻ってくる庚申の夜、人の寝ている間に体をぬけ出して、天の神にその人の悪口を言う」。そう信じられていたのです。それで、いっそ見たり、聞いたり、喋ったりしなければ、

悪口も言われないだろう、ということになり、人々は、「見ざる・聞かざる・言わざる」の三猿を石に彫って拝むようになったのでした。こうして、道ばたなどに立てられた庚申塔は、同時に道標の役も果たしてきたようです。今、片町の四つ角に残る庚申塔にも、「東江戸道」「西大山至」「南加奈川至」の文字が彫られています。



ねもじり坂

下作延に、土地の人々が古くから「ねもじり坂」と呼んでいるところがあります。言葉の由来は、いまだにはつきりしませんが、明治の中頃までは、道幅も狭く、もっと急な坂でした。東京へ野菜を運び、帰りには下肥を積んでくる牛車や荷車などは、人が後押しをしなければ登れないほどだったといわれます。そこで、別名を「はらへり坂」。さらに時代を遡ります。江戸から明治にかけて行われ、大山街道沿いでもみられた「鮎かつぎ」。相模川上流でとれた鮎を江戸へ運ぶためのものでし

た。

夕方とれた鮎を、一晩がかりで江戸の魚河岸に運んだ鮎かつぎ人夫。彼等がその道中で唄ったのが「鮎かつぎ唄」です。

鮎は瀬に棲む 蟬や木に止まる 人は情の下に住む

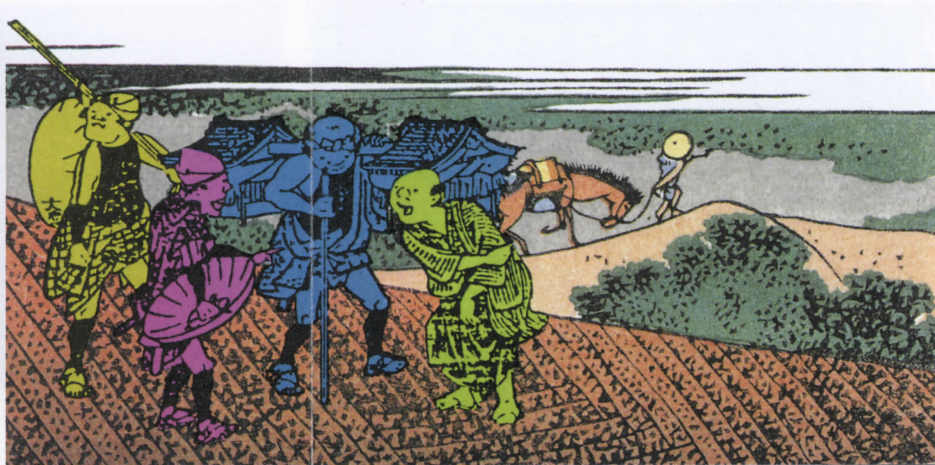
溝口の亀屋は、鮎かつぎ人夫の留め場になっていました。厚木方面からきた人夫は、ねもじり坂の上にくるとこの唄をうたって留め場に合図を送ったといわれます。街道筋の村人は、この唄で朝の支度にとりかかったという話です。



●江戸へ。四季おりおりの花が供えられる道標。



●街道の花 マンリョウ



●昭和56年頃のねもじり坂。坂は舗装されたが畠は残っている。

●川崎の歴史に関する読み物

- 川崎新風物詩●伊藤葦天■かわさき新報社・S33
 川崎史話(上・中・下)●小塚光治■多摩史談会・S37~41
 川崎市史●川崎市■同・S43
 新編武蔵風土記稿(第三巻)■雄山閣・S45
 やさしい川崎の歴史●小塚光治(編)■住吉書房・S45
 文化かわさき(1~6号)●川崎市総合文化団体連絡会■同・S50~55
 東海道(一)(江戸時代図誌第14巻)●大戸吉古、山口修■筑摩書房・S51
 閑話雑記●川崎市■島崎文教堂・S53
 神奈川の夜明け●小林孝雄■川崎歴史研究会・S53
 かわさき散歩●川崎市総合文化団体連絡会■同・S55
 わが町の歴史川崎●村上直■文一総合出版・S56

無断転載を禁ず



●川崎歴史ガイドのシンボル・マーク

このシンボル・マークは、古代の鏡を現わしています。歴史は私たちの祖先が作りだしたものです。それを再び映しだすのが、川崎歴史ガイド計画です。シンボル・マークは、歴史を甦らせ、映しだす鏡です。ガイド用の“柱、”の上に、それが必ずついています。 デザイン=栗津 潔



ガイドパネルデザイン=栗津 潔+清水まこと
 Design=栗津デザイン室 Photo=小池 汪

公益財団法人 川崎市文化財団

〒210-0007 川崎市川崎区駅前本町12-1タワーパーク3階
 ☎044-222-8821 FAX044-222-8817 頒価100円

印刷=(株)アサヒ

昭和57年4月発行
 平成15年3月増刷



●子育て地蔵。この辺が街と丘陵地との境だった。(昭和56年頃)

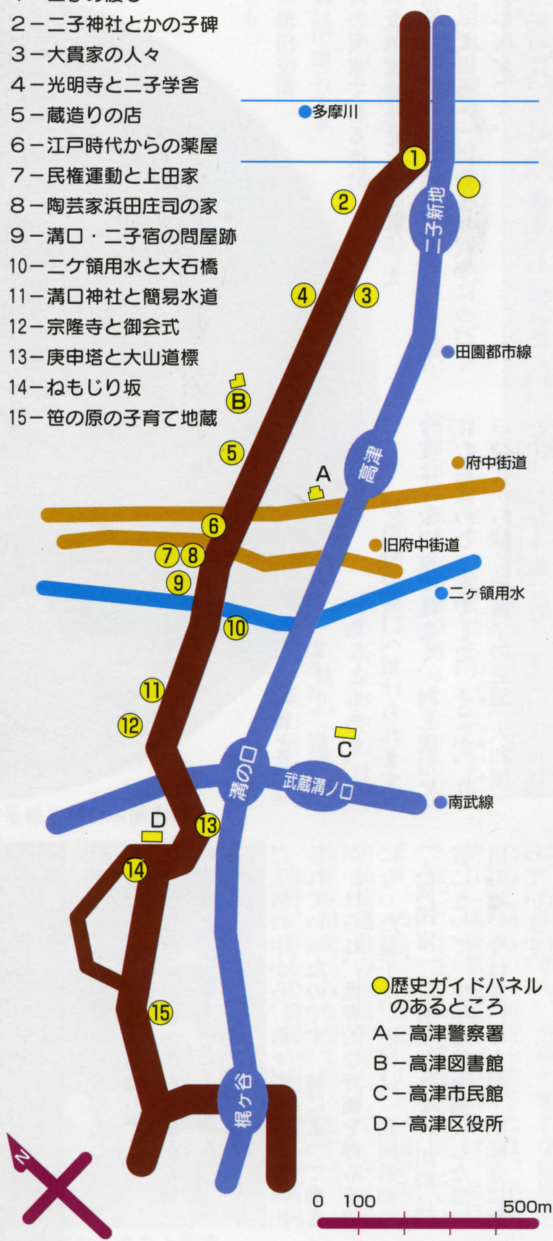
ねもじり坂を登りつめた少し先に「子育て地蔵」があります。昔、西国巡礼から戻った村人が、子を授かったお礼に建てたと伝えられています。ようやく授かったわが子の、すこやかな成長を願うてのことでしょが、今もお詣りする人の多くは、子を授かった幸運にあやかりたいと願うのですから、いわば「子授け地蔵」でもあるわけです。 笹の原という地名から、淋しい笹鳴りの中にポツンと立っていた当時の姿が想われます。大山街道を挟んで向かい合う末長と下作延の十六軒が講をつ

笹の原の子育て地蔵

くり、以来その講に護られてきた地蔵尊。誰にも共通な子供への願い、村境に近かったこともあって、両村にまたがる講がつづいたのでしょう。この地蔵の縁日、毎月二四日には、講の当番が、掃除をしたり、花や線香を供えているそうです。とくに酉年の四月二四日には、子授けを願う人はもちろん、市内や横浜にある同じような地蔵の講



- 1-二子の渡し
- 2-二子神社とかの子碑
- 3-大貫家の人々
- 4-光明寺と二子学舎
- 5-蔵造りの店
- 6-江戸時代からの薬屋
- 7-民権運動と上田家
- 8-陶芸家浜田庄司の家
- 9-溝口・二子宿の問屋跡
- 10-二ヶ領用水と大石橋
- 11-溝口神社と簡易水道
- 12-宗隆寺と御会式
- 13-庚申塔と大山道標
- 14-ねもじり坂
- 15-笹の原の子育て地蔵



エチケット

■町の歴史めぐり。寺の境内に吸いながら投げ捨てられていたり、町角がゴミや空きカンでよごれているのを見るのは残念です。せめてエチケットだけは守りたいもの。

■呼び出されてあれこれ聞かれるのも、その人にとっては迷惑な場合も多いでしょう。

■「古き時代を訪ねて」、といっても今は交通も頻繁です。くれぐれも交通事故に気をつけて下さい。

大山街道ルート



Bパネル⑧二子・溝口



Aパネル①総合案内板

川崎歴史ガイドパネル所在地

- ① 大山街道ルート総合案内
- ② 二子の渡し
- ③ 二子神社とかの子碑
- ④ 大貫家の人々
- ⑤ 光明寺と二子学舎
- ⑥ 蔵造りの店
- ⑦ 江戸時代からの薬屋
- ⑧ 二子・溝口
- ⑨ 民権運動と上田家
- ⑩ 陶芸家浜田庄司の家
- ⑪ 溝口・二子宿の間屋跡
(兼 ニヶ領用水ルート「大石橋と丸屋」)
- ⑫ ニヶ領用水と大石橋
- ⑬ 溝口神社と簡易水道
- ⑭ 宗隆寺と御会式
- ⑮ 庚申塔と大山道標
- ⑯ ねもじり坂
- ⑰ 笹の原の子育て地蔵
- ⑱ 雁追橋(ニヶ領用水ルート)
- ⑲ 南田の堰(ニヶ領用水ルート)

0 250 m 500